

# 多様な集住環境としての団地再編の空間イメージを探る ラビ団地の団地空間再編手法

MAY 2015  
 VOL. 179

文部科学省 私立大学 戦略的研究基盤形成支援事業  
 『集合住宅“団地”の再編（再生・更新）手法に関する技術開発研究』



図 1. 航空写真（ラビ団地）Google Earth より



図 2. ラビ団地 配置図



図 3. 上：改修前 / 下：改修後

## 0. はじめに

本稿では、ラビ団地の空間イメージから、「手法の考え方」「配置構成」「多彩な色彩」「シーケンス」を探っていくことにする（図 1 の赤枠で囲まれたエリアが主である）。

ストックホルム郊外のラビ団地はプロ駅から歩いて約 10 分の並行配置で 3 階建てくらいの低層で小規模な団地である。図 1 の航空写真の黄色の破線は鉄道であり、プロ駅から南東方向にストックホルムが位置する。ストックホルムの国鉄でアーランダ空港から乗り換え駅のカールスブルク駅まで約 1 時間、そこから約 30 分程でラビ団地に着く。

図 2 は改修計画の配置図で、塗り分けされている黄色で示されている部分が既存の住棟で、赤色が改修を行なった箇所である。並行配置の住棟に小単位の付属屋を付加する手法で、空間とコミュニティの再編を試みた事例である。改修前後の写真を見ても分かるように、再編手法としては、建築的な手法が非常に顕著な方法で現れている。

再生のデザイン思想が筆者の考えと近似していて、わが国の団地の建て替えで提案実現している小さな建

物を住棟に近接して配置する手法や、男山の団地再編で提案している用途不可分として創る木造離れの増築にも似た考え方である。日本の団地において、人口減少時代における郊外団地の再編手法として、実現の可能性を大いに感じる事例である。

その最新の状況を報告し、考え方とデザインの巧拙の効果を考えてみたい。

## 1. 手法の考え方

ラビ団地は、並行配置の住棟に主に洗濯室やガレージなどの小屋単位の付属屋や色や素材のディテールを付加しながら、一部住棟の最小限の改築を行い、全体の環境を集落的なものに変えて親密感をつくりだしている。近代は、機能と空間を 1:1 で考え過ぎていたが、ここでは、機能で空間をつくっていくのではなく、それぞれその場所ごとにつくり方を変えることで、多彩な色彩、小さなディテールの追加や、小さな片流れの外部物置や三角屋根の面白い洗濯室、あったりなかったりする専用庭のための塀、ありとあらゆるものを混ぜながらつくっていき性格を与えている。規則的なルール化はされおらず、最小限の効果で、多様な変化を生む最大限の効果を出そうとしている。

## 2. 配置構成

図 4 のガレージのみが並ぶ様子を通りのように見える。これは、ガレージのみを並べるのではなく、ガレージよりも少し後退したところに洗濯室や物置などの、全て異なるスケール、異なる色で違うようにつくられているものがガレージとガレ





一階の隙間に見え隠れしながら配置されている。その結果、その隙間がそれぞれ異なる性格の空間になっている。

並行配置の中庭部分（図5）は、物置を適度に分けながら配置し、1階の居住者の専用庭や、2階は建物のバルコニー同士を繋げて大きな家がつくられていたり、蛇行している道に対してその配置を微妙に変えたり付属屋の軸を少しずらしたり、向こう側の中庭内に小さな建築を配置したりしている。それに対して、真ん中に芝だけが広がっている中庭（図6）のところもある。

道に変化をもたらす配置として、近づくると建物内の様子を伺える、全然違う異質な要素の付属屋は小さいが故に自由な配置ができ、通りに対してアイストップを作りながら、単純な並行配置の構造に混ぜていく（図7）。さらに住棟の一部の改造を行っている部分は、アイストップとなったり道の変化が起こる場所である。例えば図8の場所では、手前から奥に続く道からのアイストップになり、奥から接続してくる角地に

なる場所の部分に最小限の改築が行われている。

団地の中央の通りに面している付属屋（図9）は、窓を開けているところもあれば開けていないところもあり、また、ガレージや塀を意図して通り側に出して作ったり、それらと共存するように施設をつくり、狭いところ、広いところを作ったり、奥に見える広い築山をつくったり、建物の配置を通り側に出すことで道が曲がっていったり、アイストップのところは住棟の改築するといった工夫が見られる。

このように特徴的な道に面する部分は最小限の操作で小さな建物を配置し、その他はあまり意図的な操作を行っていない。そういう部分があるからこそ、再生前の並行配置の単純な構造をそのままに、配置構成を場所ごとに変えて混ぜることで、中庭も通りも一つとして同じ空間はないという状況が実現できている。

### 3. 多彩な色彩

図10では一つのシーンの中に多様な色が写りこんでいる。似たよう

な色使いをしている場所も何箇所もあり、すべて色が違ってはいるわけではないが、規則正しく配列ができていないものに、違う色を全体に対して均等な割合で塗ってしまい多様な色を使い均質的な空間になった他の事例とは異なる空間になっている。多様な色を使うことだけではなく、ボリュームのスケール感の操作、それに加え、同じ色の連続する部分や数カ所にしか塗られてない部分など色を塗り分ける際に、抑揚がつけられていることも重要である。

さらに、ラビ団地では、住人にとっての了解する範囲であるコミュニティ単位での色分けや素材分けを行っていることで、なんとなくの秩序が作られている。安価な素材であっても縦方向に使うか、横方向に使うかなど、混ぜ合わせながら色の種類、差し色など細かく変化していることで見えてくる大きなボリュームを作らない。図11のように、色や素材の組み合わせ方が多様である。薄い水色の壁と黄色の煉瓦のテクスチャの淡い色の中に窓枠の赤色が差し色としてテクスチャに変化を





与えている。

図 12 の水色の左の建物の窓枠は赤と白と違っていたり、その建物の向こう側に見える白い建物の窓枠は赤色になっている。隙間に緑色と赤色の付属屋が見えてきたり、色の混ぜ具合が、規則ではなく現場で考えられていることを想起させる配置関係であり、多様な色が使われていて、歩いていて楽しい空間になっている。窓枠や配管など付属する小さなエレメントに様々な色を用い、外壁の色に揃えるのではなく、対比的な色彩を用いたファサード構成が多く見られる。

色味が白の割合が多いゾーン（図 13）や、青の色味が強いゾーン（図 14）、あるいは、それらの色が混ざっているゾーンがある一方で、色のあるものを付加していないゾーン（図 15）もあり、色の多様性のある組み合わせ方が異なる。さらに、それらの違うゾーンとの連結の仕方も異なるので、一つとして同じ風景になることはなく、少し振り返ると今まで見る風景とは違う風景を見ることができる。

#### 4. シークエンス

住棟だけの時は住棟の大きな影が落ち暗くなるだけだったが、付属屋や植栽などの小さな単位がいろいろな配置の仕方をされていることで、細かな光と影の変化が起こったり、想像もしない角度から光が差し込んできたり、現象的に空間の変化がおこる。そのため、図 16～18 の写真からわかるように、大きな移動をしているわけではないが細かくシークエンスが変化する通りになっている。また、逆光（図 19）と順光のとき両方とも光と影の細かな変化をヒューマンスケールで捉えることができ、図 20 のように、手前の窓枠が写り込んだ形、木陰、赤色の明るいところと影として暗い赤色になっている部分があったり、影の形・色が多様な景観になっている。さらに、建物だけではなく、塀、パーゴラ、石、ブランコ、バスケットゴールなどの遊具や素朴な石が置かれていたり、芝、煉瓦、アスファルトと舗装材が作りすぎられておらず、それらが重なることで、複合的な景観になっている。建物に近づいていくと、図 21 のように左側の住棟に窓ガラス

があることで向かいの壁側に光の反射によって窓枠の模様が映り込むという、当たり前起こるであろう現象的なものを受容することで、自ずと複合的な空間が体験できる。ほとんどの人々が無意識のうちにその体験に気づかずに通り過ぎていたことが、デザインとして素晴らしい。街並みの写真を多く撮影したり、既成市街地の路地の入り組んだ街などに訪れたことがある人は感覚的に意識できるかもしれないが、経験したことがない人は特別意識していない。しかし、気持ちの良さは感じている。こういったことを想定し、計画することが、変化に富んだシークエンスをつくる際には重要なことのひとつなのである。

そういった特徴的な通りとは対照的にその横道に入っていくと、付加されたものが比較的少ない場所もある（図 22）。また、中の通りに戻ってきて、後ろの方に歩いていくと、違った形の勾配屋根のものができたり（図 23）、同じ道を行って帰るだけでも、風景の見え方に変化があり場所の性格が全てにおいて同じものはない。小さなものの付け





足し方で、多様な変化を生むいい事例である。また、天気や時間帯によってもすべて変化がある。

北欧の気候では、晴れた日には空気が澄んでいるが、冬は雨や曇りの日が多く暗いため印象が異なる。晴れた日は、木陰を写し込み、光、影による変化が大きく影響する(図24)。似たような水色の小屋が並ぶ場所であるが配置や舗装、ドアの色が違うだけで、影の落ち方、雰囲気随分と違う(図25)。雨の日は、小屋の水色の色の変化はないが、暗い中に明るい色が映えている(図26)。さらに雨で濡れた舗装のタイルに木が写り込む様子など、艶っばいい雰囲気を醸し出している。図27は物置に挟まれた道だが、物置の間を歩いている感じはなく、また、よく見ると同じ形のものはない。

雪が降るにも関わらず駐輪場に屋根がなく自転車を外に並ぶ風景があったり(図28)、雨や曇りの日が多く明るい色の小屋ばかりかと思っていると黒色の小屋が出てきたり(図29)、積雪時に黒色と対比されて雪の白さが映える風景が想像できる。



妻壁はいじらずに、木製の棚だけを貼り付けていて、春になったらそれに緑が張り付いていく様子も想像できる(図30、31)。一つ一つが綺麗なわけではなく、しかし、住宅地として適度に雑然としているのも魅力的である。

### 5. これからの展望

従前の並行配置の住棟だけの時は整然とした建物の存在だけが目立っていたが、再編後は建物の手前なのが目立つことで住棟の存在が消され、ヒューマンスケールな空間がで

き、多様に化するシーケンスが連続する空間が生まれ、様々な様相が見ることのできる複合的な景観に再編されている。

そして、①建築的手法のルールを一様にせず、様々な手法を適切に混ぜ合わせる、②その場所ごとに対応したものが緩い構造を持ちながら複合的に重なり合っていくこと、③最小限の効果で、多様な変化を生む最大限の効果を出すことが、このような空間を形成する手がかりとなり、均質単調な団地空間の再編のイメージにつながる。

関連リーフレット：180

多様な集住環境としての団地再編の空間イメージを探る  
『ラビ団地の団地空間再編手法』

レクチャー：江川 直樹（関西大学 教授）  
作成協力：大田 美奈子（関西大学大学院 博士前期課程）  
宮崎 篤徳（関西大学 先端科学技術推進機構）

（講演：2015年4月27日）

本リーフレットは、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「集合住宅「団地」の再編（再生・更新）手法に関する技術開発研究（平成23年度～平成27年度）」によって作成された。

発行：2015年5月

関西大学  
先端科学技術推進機構 地域再生センター  
〒564-8680 大阪府吹田市山手町3丁目3番35号  
先端科学技術推進機構 4F 団地再編プロジェクト室  
Tel : 06-6368-1111 (内線 : 6720)  
URL : <http://ksdp.jimdo.com/>